第5回三池にまなぶ会

全国から三百人の参加

「CO守る会」の討論も

〝第五回三池にまなぶ会〟は一月二十七日から二十九日まで全国各地から三百二十名の参加者を えておこなわれる。各地で合理化と闘う青年たちをむかえて、四年間のCO闘争の中間総括をふくめ、ともに語りあおう。

〝CO守る会〟の契機に

われわれが四年間、とくに昭和四十一年十月以降、はげしく闘ってきたCO闘争は全国の仂く仲間に深い共感をよびおこしたが、なかでも〝まなぶ〟に結集する青年たちは社青同などとともに先進的にCO闘争を闘ってきた仲間たちである。

社青同が組織してきた「九の日行動」などにより、あるいは署名に、あるいはカンパにたちあがり特別立法制定運動の時期には東京をはじめ各地ではげしい宣伝と抗議行動をくりかえしてきた。

これらの青年たちは、それぞれの職場で日々の低賃金と重労仂、きびしいしめつけと闘っている人たちであり、それだけにCO闘争も、よりいっそう闘いぬいた人たちでもある。

いま、われわれは四年間のCO闘争をふりかえり、さらに長期にねばり強く、より発展させるために、全国に〝三池CO患者・遺族を守る会〟を結成し、反合理化闘争の全体的な前進のなかでCO闘争の発展をかちとろうと決意している。

われわれはこの三日間を、青年たちと身体をぶっつけあって語りあい、全国に組織する〝守る会〟の契機をつくりだそう。

〝三池にまなぶ会〟の日程

【第一日】一月二十七日(土)
12・00～13・00 受付(大牟田労仂会館前)
13・00～17・00 三池にまなぶ会(於・労仂会館ホール)
①三池労組・組合長挨拶
②三池主婦会代表挨拶
③参加者代表宣誓
④三池の現状報告
⑤日程説明
17・00～18・00 地域分会の割当案内
19・00～22・00 地域分会との交流会

【第二日】一月二十八日(日)
9・00～12・00 全国のたたかいの分散交流
13・00～17・00
①合唱詩劇『三池のたたかい』の観賞(於・筑後市民館)
②講演会=小島恒久先生
17・00～22・00 地域分会との交流会

【第三日】一月二十九日(月)
9・00～12・00 各支部ごと総括会議
13・00～16・00
①問題提起=塚元書記長
②各支部参加者代表報告
③これからの〝まなぶ〟の活動について
④アッピール採択
⑤合唱『がんばろう』
⑥解散

写真はCO闘争の発展を誓った去年のまなぶ会

火花

お互いに教訓を学び げきれいし合おう

日炭高松労組 T・T生

お正月もいをして獲得した既得権をバク返上して闘奪されています。昨年の十二月争している に起きた災害もこれが原因です貴労組の組 私たちはお互いに交流を通じ合員の団結 て、他組合から教訓を学び、激力と統一力 励し合うべきではないでしょうに敬意を表 か。甚だ身勝手ながら、こんどします。

さて、生 の春闘には団結して闘えるよう産第一主義による結果、どこの またみんなが良心に立ち帰って炭鉱でも保安がおろそかになっ 闘うよう、私たちの組合にハッています。私たちの組合は、管 パをかけて下さいません。

理炭鉱とはいえ、組合員の組合 **安河内を追い出せず残念**

運動に対する無関心と労資協調 **求めにより匿名**

ムードの中で、昔血のにじむ思 謹啓、十二月一日号の〝みい け〟を、有難うございます。

〝組合原性病〟の名づけ親の安河内ヤブ医者の文章は、ついに彼の本性をバクロしましたですね。

労災療養所開所以来、約一年の私の入院中の印象が的中しています。やっぱり会社の番犬でしかなかったのです。

形だけの労災病院の設備は外見ばかりで、事務的で、三井資本にあまい汁を吸わされたか、常に一人でも早く療養所から追い出して成績をあげようとするのが、安河内の本性です。

彼は、直接目から患者に聴診器を当てたことはなく、主治医まかせで、その上主治医に督励して、退院を督促していた。

私は家庭の都合で早く退院したので「安河内追い出し」の声を実らせることもできず残念ですが、今後とも皆さまとともに闘いを進めて行きたいと思います。

なお被災当初、もっとも軽症と自認していた私ですが、最近の症状からとにかく仂けない身体になってしまいました。

愛の手を差しのべます

佐世保地区労青婦協 日放労佐世保分会

三池の炭じん爆発以来、私たちの同胞が体制側が押しつける悪質極まる労仂条件のために、CO中毒患者という悲惨な犠牲者になっていることは、まことに憤慨に耐えません。

マスコミの転場で仂く私たち体制側の責任を追及するとともに、三池のCO中毒に病む同胞に愛の手を差しのべるため、佐世保地区労青年婦人部の多大な協力を受け、慈善ダンスパーティを開催しました。

雪がパラつくにもかかわらず反響を呼び、参加人員三百有余となり、佐世保市民の暖い志が沢山集まりました。お送り致しますので、どうぞCO中毒に病む患者、あるいはその家族の皆さんに愛の手を差しのべて下さい。やがてCO患者のご家庭にも春がくることを信じつつ、筆をおきます。

×

なおこの便りには、カンパのお金が同封されていました。心からお礼申し上げます。

〈二つの発言〉

労働者は生物機械

—日経連の方針より

「災害の七〇%が行動災害である。これは人間の不注意から起こる。そこでこの人間の不注意に立ち向うにはどうしたらよいかだが安全教育だけでこと足れりとするのは、教育に対する過大評価であり、それは万能とはいえない。それには新技術とそれを動かす人間との関係を究明し、作業条件をとのえてやるのが得策である。労仂者を人間であるとみる前に、生物としてみる人間工学的な手法をとり入れてゆかねばならない」

労働者のことはしらない

—早川労働大臣

「年間七十七人もの労仂災害の被害者が出ている今日、労仂災害被災者の前收補償とか、解雇制限とかいうことを法律化すれば、全体の経営者に迷惑がかかるではないですか。そんなことはできませんよ」(昭和四十二年七月、CO特別立法に関する記者会見で語った早川労仂大臣のことば)

(いずれも社青同福岡地本発行のパンフ「青年」より)

筑後地区

CO患者を守る青年の会が発足

一月二十八日筑後市民会館で行なわれる「三池の闘い」の公演はまなぶ会三百人のほかに、筑後地区CO患者を守る会、社青同八女支部が筑後、八女地区の人びとによびかけた五百人が参加する。

筑後地区CO患者を守る青年の会は、筑後市を中心に約十五名の青年たちが集まり昨年十一月に結成された。

同守る会は昨年夏以来、熊大見舞や、大牟田のCO患者を守る青年の会との交流などをつみかさねてきたが、昨年十二月に正式に発足したものである。

同会は「三池の闘い」公演主催をするにあたって、CO患者家族との交流など何回となくつみかさね意志統一を行なっている。

二十八日まで、毎日同地区の家庭を一軒一軒まわってCO問題を訴えながら参加をよびかけるなど努力をかさねている。

労仂者が力をあわせて作った ドレイ工場

岩崎昶

映画「ドレイ工場」は日本映画の未来に通ずる新しい道しるべとなると私は思う。

読者はもうこの映画のことをよくご存知だと思われるので、あまりくわしく述べないが、総評、東京地評、全金、そのほかたくさんの労仂組合やマスコミ関係の民主団体などが集まって結成した「製作上映委員会」が、専門映画人と協力して完成したすばらしい計画のみのりがこの映画である。これは戦後独立プロ全盛時代にも実現できなかった大きな仕事である。

というのは、そのころは、いい映画を製作することはできても、配給と上映の手段が弱体で、経営的に赤字をしょいこみ、ついに衰え破産に追いこめられた。

「ドレイ工場」はその教訓を生かして、自分の手で作るだけではなく、自分の手で配給上映まで全部やってのけるという計画をたてた。これがすべての成功の原因だった。普通一般の映画は不特定多数の観客を相手とする。が「ドレイ工場」ははじめから「委員会」に組織された労仂者という特定多数を対象としそれにアピールすることに集中した。製作費もそれに仰いだが、同時に脚本についても意見を仰いだ。その人たちがほんとに参加した。「十万人のプロデューサー」ということばがポスタに書かれていたが、それはたんなるスローガンではなくて、実際に実行された。

いまのところ、この映画は「製作協力会員」として前もって二百五十円の会員券を買った人々を招待する完成祝賀会で上映されているという、つまり会員制の上映であるが、これが連日超満員だというのを耳にして、市中の一般映画館からも多くの上映の申込みがきていて、来年の二月ごろからは商業ルートでの一般公開がおこなわれる予定だという。

さて、「ドレイ工場」のできばえについて書くのがおくれてしまったが、ひと口にいって、傑作だといいきれる。こまかいアラをさがしたり、欲をいったりすれば、まったくないとはいえない。それは、どんな名作だってそうだ。しかし、これほど仂く者の気持をしっかりとつかんだ映画は、これまでにほとんどなかったのではないか。

今日の工場で仂いている労仂者の生き生きした姿を、そのいろいろなタイプの群像を描きわけている。新しい労仂者もいれば、古い転人気質の連中もいる。出世主義や利己心からスパイに堕落するものもいれば、人間的なあたたかさと高い政治的な判断力をもった指導者も出てくる。そういう人たちをみていると、たしかにこれこそいまの日本の労仂者たちの血の通った姿だと実感がわいてくる。たたかいのなかで、苦しみ、その苦しみのためにどんどん強くなっていく労仂者たちをみていると、私はジーンと胸があつくなってきて映画が終ったときには、眼がまっかになっていて、外へ出るのがまぶしかったことを白状する。

「ドレイ工場」は、荒廃したいまの日本映画の中ですばらしい收穫だというだけではない。また労仂階級というだけでもない。市民や商人、学生、すべての日本人にみせたい映画である。(いわざき・あきら氏は映画評論家)

(労仂ニュースより)